

過疎地域における郷土史の継承をめぐる課題 —石川県奥能登を題材に—

中山 隆一郎

現在、日本の地方部、特に過疎地域と呼ばれるような都市から離れた地域では、自治体が消滅する可能性があるとする考えが発表されている。このような状況で、将来的に消滅する可能性があるとした自治体ももし本当に消滅するとするならば、その地域の歴史や文化等が失われるということにつながりうる。どのようにその地域の歴史を将来につなげていくことができるのであろう。

そこで本研究は、地域で刊行された郷土史の刊行状況や図書館での扱いを確認することで、地域の歴史を伝えていくために何ができるか、何をしていく必要があるかということをはっきりとすることを目的とする。対象は石川県奥能登地域の輪島市・珠洲市・能登町・穴水町の2市2町である。

郷土史や自治体史に関連する論文や図書による文献調査、「石川県郷土資料総合目録」を中心とする目録類および現地の公共図書館を訪問しての郷土史の状況調査を行った。文献調査の結果、郷土資料が必要とされる場として、義務教育課程における郷土教育や、生涯教育といった社会教育の場があることが明らかとなった。また、日本各地で郷土資料を様々な側面から利用した取り組みが行われていることも明らかとなった。自治体史については、明治時代から取り組みが起り始め、その後、高度経済成長に伴い刊行冊数が増加していること、複数回の編さん事業が行われるなどして現在も各地で刊行が続いていることが明らかになった。

石川県の郷土史に注目すると、県全体ではおおむね全国の自治体と同じような時期に刊行されていることや、刊行の主体は自治体であり本研究で対象とした郷土史の大半を占めていることなどが分かった。奥能登地域に注目すると、県内の他地域に比べて刊行冊数が少ないことや、平成の大合併における記念誌の刊行が多いこと、各自治体の図書館は比較的小規模ながらも郷土資料を所蔵しているがその取扱いには違いがあることなどが明らかになった。また、地域住民が郷土の歴史に関する活動を行っている例も確認された。

奥能登地域の課題として挙げられるのは、自治体が郷土史を刊行し保存や利用の環境を整備している状況であることから、住民が郷土の歴史を継承していく事業の存在を知り、その意義を理解することが必要であるという点である。郷土史を絶やさず、今まで受け継がれてきた郷土の歴史を将来に継承していくには、郷土学習や社会学習、図書館にある郷土史などを入り口として、地域にある郷土資料の魅力や有用性を知ってもらう必要があるだろう。そしてこの指摘は、奥能登地域だけでなく、全国の過疎地域にも当てはまる部分があると考えられる。

(指導教員 白井哲哉)